法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-28

口碑のヴァレー地方

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

(出版者 / Publisher)
関西学院大学商学部商学論究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
商学論究
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
39
(終了ページ / End Page)
57
(発行年 / Year)
1991-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003071

口碑のヴァレー地方

加　太　宏　邦

O, môuntagné dè Tènèvé,
Jiamè pliô tô réjiènèré ![1]

はじめに

本論の目的は、スイス・ヴァレー州に残るいくつかの口碑[2]を素材として、この地方にかつて存在していた心性の構造を探ることである。また、アクチュアルな視点からの考察をいささか加えることによって、付随的にだが、この地方を通時的にも描き出せたら幸いだとかんがえている。言うまでもないことだが、口碑は、活字メディアによる伝達とは異なり、語り手から発せられたメッセージが網目状に空間的、時間的に放散状態で伝播し、伝承された限りでは共同記憶と化していくという特質を持つ。このため、集団の心性を捉えるのにもっとも適した資料となるのである。

I

ここで私たちが対象とするヴァレー州 Valais／Wallis（前者が仏語、後者が独語綴り。以下同じ）はスイス南部のアルプス地方に重なる州の名前である。この州はさらに〈上ヴァレー〉Haut-Valais／Oberwallis と〈下ヴァレー〉Bas-Valais／Unterwallis に分かれる。その両者は地形的にはシェーホルン山

1)「テネーヴェのお山よ、おまえはもう二度ともとには戻るまい」（シェルミニヨン村の地域語による）。Alfred Rey : *Pachatéin*, Sierre, 1982. p. 55. また、注12)の口碑参照。

2) ここで、口碑というのは、伝説、民話、昔話などの上位概念としての“口頭伝承”の意味で用いている。ただ、文化人類学で言う口頭伝承は儀礼や技芸の伝承も含むため、私たちはテクストとしての語りに主眼をおいた口碑という言葉を用いることにした。

Scheehorn (3175㍍) と、ベラ・トーラ山 Bella Tola (2998㍍) を通って、ツィナルロートホルン山 Zinalrothorn (4221㍍) とを結ぶ山陵で区切られ、東側を〈上ヴァレー〉、西側を〈下ヴァレー〉と称する。この区分は地勢の著しい差異によるものでなく、言語の差異によるもので、すなわち、〈上ヴァレー〉ではドイツ語が、〈下ヴァレー〉ではフランス語がもっぱら住民の使用言語になっている。ヴァレー州は二言語使用州である。この上下両ヴァレーをローヌ河 Le Rhône／Rotten が貫流し、右岸にベルン・アルプスが、左岸にヴァレー・アルプスが迫るほぼ完全な山岳地帯である。さらにいくつかの予備的な情報として、次の数字であげておこう。同州の面積は 5,226㎢〔ほぼ愛知県と同じ〕、人口は 206,367 人 (1986 年)。人口密度 39 人で、スイス全体の人口密度 154 人、チューリヒ州 650 人、ジュネーヴ州 1,237 人に比して人口は疎である。一般の日本人になじみの地名で言えば、独特な山容で有名な〈マッターホルン〉、車の入らないリゾート〈ツェルマット〉、古代からの難所〈サンプロン〔シンプロン〕峠・トンネル〉そしてセント・バーナード犬で知られる〈サン・ベルナール峠〉などがこのヴァレー州に具体的なイメージを与える一助となるかもしれない。このように屹立する山々といくつもの深く入りこんだ谷が支配的な地勢で、村落はその谷ごとに孤立した状態にあり、長らくそれぞれが独自の文化[3]を保持しうる地理的条件があった。

人々は谷ごとに「ツェンデン」dizain／Zenden というヴァレー地方独特の共同体をつくり、それら同志がゆるやかな同盟を結びあって 1416 年に、現在のヴァレー州のほぼ⅔にあたる統一体的な地域を構成した。西部の⅓くらいの地域はサン＝モーリス政体という独自の自治組織を維持し続けたが、これらが後

3) たとえば、この地域内の地域語の多様さがそれを象徴している。一例として Un homme avait deux fils「ある人に二人の息子あり」(ルカ伝、第15章-11節) を、19世紀半ばに記録されたヴァレー地域語であらわしてみる。
サン＝リュク村：Oun hommo avèye dou féss. (Saint-Luc)
エヴォレーヌ村：Uon hommo avek dau fiss. (Evolène)
ヴェトロ村　：On hommo l'avai dou matton. (Vétroz)
サンブランシェ村：On homo avé dou boubo. (Sembrancher)
Doyen Bridel：*Glossaire du Patois de la Suisse romande*, Lausanne. 1866. pp. 427–436.

(1815年) に合体してスイス連邦に加盟し、ヴァレー州となったのである。それはスイス最後の州でもあった (ジュラ州は1979年加盟であるが、これはベルン州から分離したもの)。

これだけ孤立した村落[4]が、言語の違いなどにもかかわらず、比較的安定したひとつの文化圏を形成し続けて来られたのは、主にカトリック信仰という中心軸が強く働いていたからだと思われる。スイスは周知のように、宗教改革の際、そのほとんどの地域がプロテスタント化した。その中でフリブール州とともにカトリックを守り続けた数少ない地域のひとつである。カトリックはヴァレー州の特質を他州から示差的に浮かび上がらせる重要な要件となっている。また、一面では、カトリシスムはこの州の後進性の結果であり原因だとも言われるが、しかし、この"後進性"こそが、私たちの考究の資料となる口碑の保蔵庫の役目を果たしたのである。

そうは言っても、自律的・閉鎖的ヴァレー地方も、今世紀に入ってとくに第二次世界大戦後、スキーなどのリゾート地、観光地としての外の世界を持ち始めた。モノ的に開放されると同時に、"心性"としてのヴァレーも急速に一般的スイスに溶融していくのは当然である。いわゆる固有文化はほぼ消滅するか変容を余儀なくされてしまった、と言ってよいだろう。

本論ではこのヴァレー州の中でもとくに〈下ヴァレー〉、すなわちフランス語圏ヴァレーを採り挙げて考究の対象とする。以下、本論では、とくに断りのない限りヴァレーはこの下ヴァレーをさす。

II

ここで考察の資料として用いるのは、『滅びゆく口碑』*Ces Histoires qui*

4) ヴァレー州には人口1万人超の町は4つしかない。州都のシオン Sion の23,244人を筆頭にシエール Sierre 13,098人、マルティニ Martigny 12,307人、モンテイ Monthey 11,516人である (1986年現在)。しかもこれらの町はいずれもローヌ河畔の限られた平野部に集中している。また、これらは、生活の匿名性とか多様な情報・価値の錯綜などの都市の特性をそなえ得る規模の町でもない。ついでに言えば、ヴァレー州には大学が存在しない。

meurent[5] である。この口碑集についていくつかのことを、同書の前書きを参照にしつつ簡単に述べておきたい。

同書はスイス・ロマンド・テレビとジュネーヴ民俗資料博物館が共同で1981年、下ヴァレーに入って、口碑採取を行い、そのビデオ映像を、同年9回連続放映したのち、1982年、放送しなかったものを一部加えてそのまま活字化し、出版したものである。採取にあたっては、伝承の意味を極力厳密に解釈し、語り手がかつて直接自分の耳で聞き、それを記憶しているものに限った。また、語りに文飾をほどこしたり、内容に文学的なバイアスをかけないことを要求した。この意味で同書はかなり一次資料に近いと考えられる。私たちが同書を選んだのは主にこの理由からである。

ところで、この取材についての困難さについてもう少し触れておかねばなるまい。というのは、口碑蒐集についての困難さは、口碑そのものの存在の困難さをも語るからである。そして、その理解が、ヴァレーの現状の把握にもつながるだろう。

1980年のスイスでは、いかに山峡の村落とは言え、通常の近代社会から隔絶した地区などは在りえない。それどころか、まず、一般の情報は、スイス自体が小さいだけに、日本における山間僻地と呼ばれるところ以上に浸透していると言えるだろう[6]。従って、いわゆる未開社会からの採取というような水位の高低差を利用したストレートな接近は現代スイスでは不可能に近い。

まず、インフォーマントを探し出す困難である。そしてその困難さは、主につぎの二点にある。ひとつは、インフォーマントに名乗り出る人が少ないこと、もうひとつは、応じてくれた人々もそのほとんどが、採取目的とした口碑の本

5) Christine Détraz et Philippe Grand : *Ces Histoires qui meurent, Contes et Légendes du Valais*, Editions Monographic, Sierre, 1982.
なお同書の一部は『スイス民話集成』(スイス文学研究会編 早稲田大学出版部、1990年) に拙訳によって紹介されている。pp. 321–402.

6) たとえば、一所帯あたりの新聞の発行部数は下ヴァレーの中心シオンでは全国平均の約2倍となっている。*Strukturatlas*. Ex Libris Verlag, Zürich. 1986. p. 280.

当の意味での伝承者ではもはやないということである[7]。しかも適格者ほど語りたがらない、という問題もあった。つまり、口碑の存在は、ヴァレーの誇りでなく、かつての後進性（無知、貧困、苛酷な生活条件、迷信など）をあからさまにする“恥”であるという認識、つまり、その程度の近代的教養が十分浸透している現況を今更ながらはっきりさせたのである。それは、自分達が語る過去の世界を“町”の視聴者や読者は、現況と区別する配慮なく、たんなる好奇心で見るだろう、そういう晒しものにはなりたくないというメディアへの警戒をも表しているのである。また、“町の者”の身勝手な郷愁や懐旧趣味、骨董趣味の対象になりたくないという、反撥心もあった。

注記 7）でやや詳しくその経緯を述べているように、蒐集された口碑の数は意外に少なかった。口碑は絶滅の危機に瀕しているのである。その理由を補足的に述べておきたい。

忘却の理由は、もちろん、ヴァレーの伝統的社会の崩壊と結びついている。記号としてのことばが運ぶメッセージが解体し、指示対象を宙に浮かせてしまったのである。インフォーマントは結果としてみると、63歳から91歳までの世代だけになった。彼らは、子供時代に親や祖父母から聴かされた噺を次代にリレーする機会を持たない、いわばアンカーなのだ。インプットのみでアウトプットがないため、語り伝えたことのない口碑継承者が“正確に”語れなかったのはやむをえないことである。しかし、理由はこのような受動的、必然的なものだけでなく、積極的な忘却志向にもあった。近代人の常識との乖離を

7）同書によれば、1981年6月にインフォーマント探しを開始、テレビを通じて幾度か呼び掛けをしたがこれに応えた人はゼロ。そこでヴァレー地方地元新聞4紙（*Le Nouvelliste, Le Confédéré, Le Peuple Valaisan, 13 Etoiles*）に広告掲載。13人応募。いずれも不適格者（創作民話作家、グリムなどの既存童話の祖述者、アシスタントとしての協力の申し出者、民話愛好家、幼児の思い出を語る人等々…）。そこで、下ヴァレー全域の76市町村長に協力要請の趣意書送付、うち25市町村から回答。計74人の口述者の紹介を得る。これと、別ルートで求めた80人ほど、合わせて150人のインフォーマントを得る。しかし、その中でも、噺が厳密な意味で〈語り〉の形態を保っていたのは26人。一部分忘却、不正確、混同、筋の不整合などの障害が予想外に多かった。最終的に伝承物語数142話が採取されるに至った。うち、放映されたのは22人、64篇であった。Op. cit. pp. 15–27.

かんじさせるこのような口碑を保つことの空しさから、人々は進んで伝統を廃らせることも十分かんがえられるからである。

継承の現場の消滅（それはもとより伝統の問題と切り離せないが）という別の側面からの接近もできる。口碑はヴァレーでは、おもに山小屋や自宅での“夜鍋” les veillées[8] で伝えられた。しかし、近代化によって、一日の中での〈労働時間〉と〈余暇・休息時間〉の区別が行われるようになり、それは夜鍋の習慣の崩壊につながった。かつて、夜鍋には一族が集まって、皆が室内の労働（男は手先仕事、女は機織り、子供は胡桃割りなど）をしながら“夜伽”の語り手、聞き手になった。この伝承媒体の消滅は密接にその語られる内容世界の喪失の一部であり、いわば自己言及のパラドックス風に一挙に一切の成立を不可能にしたのである。

さらに地域語の消滅という問題も射程に入れておかなくてはならない。これら口碑はヴァレー各地域語で語り継がれてきた。しかし、公教育は地域語を平定し続け、比較的若い層はもう地域語を使用しない。しかし一方、生き残ったわずかの口碑は実際は地域語で伝承されてきたものである。この地域語は先に触れたように、谷ごとにかなり異なる。従って、これを、放送なり、出版なりのマスメディアに乗せるためには、規範的フランス語（いわゆる〈ヴィクトル・ユゴーのフランス語〉）に置き換える他ない。語るべきものと語られてしまったものの間のズレ、いわば、地域語が切り取っていた意味世界の変容だが、それがどの程度、どういう形でもたらされるかは計測しがたいとしても、おそらく、伝承をきわめて困難にしている要因のひとつだろう。

以上みたように、口碑の蒐集の困難さが、じつは口碑そのものの存在の困難さと表裏一体で、現代のヴァレーの姿を語っているのである。

Ⅲ

今日、シャルル・ペローを読んで、猫が長靴を履いたり、喋ったりすること

8)「夜鍋」については、同書 pp. 31–2. また、Maurice Zermatten : *Contes et légendes de la montagne valaisanne*, Denoël, 1984. pp. 13–107.

を“嘘”だと言い張るひとは稀だが、ヴァレー口碑の世界の、マジナイで盗人が捕まる体験談（後述）の伝承に接して、これをいかなる意味でも“真”なる言説として取るひとはこれまた稀だろう。なぜなら、ペローの猫は今も認知されている〈物語〉世界の真実であるのにたいして、口碑はどのような〈世界〉の現実なのかが不明瞭だからである（『遠野物語』の柳田国男の言を借りて言えば「少なくも現代の流行にあらず」なのである）。私たちは、口碑を手掛かりに、これらの言説を現実と捉え得た人々が生きた、今は隠蔽されてしまった〈世界〉をいささかでも明らかにしたいとかんがえるものである。その場合に、〈世界〉というのは、社会構造（親族体系とか共同体組織など）のことでなく、心性の構造である。したがって、私たちの知りたいのは、実体論的事象でなく、ある価値観を含んでいる言説世界である。

まず、私たちは次の二つの口碑を手掛かりに、ヴァレーの世界に入り込むことにしたい。

アヴァン村の〈聖三位一体〉[9]

アヴァン村の私の祖大伯父にあたるジョゼフ・ソチエ爺さんは若い頃、無神論者だったそうだ。日曜にも狩りをする密猟者だった。ある冬、山に籠り松脂を集めたり密猟をしていたら、この上なく美しい女の霊がふうっと現れ、彼にこう言った「ジョゼフ、日曜に狩りをしてはなりません。教会へ行きなさい」。たまげたジョゼフは爾来敬虔な信者となった。皆が彼を〈聖霊〉とあだ名したので、おっとうが〈父〉、ガキが〈子〉だとすりゃ、おれたちあわせて〈三位一体〉だなと納得したとさ。女はマリア様だったにちがいないな。

マルケ・ブラン草地のアントナン[10]

今から約600年昔、エレマンス谷のマルケ・ブラン草地にアントナンという男が住んでいた。誠実な男だったが、近くに教会がなく、遠くヴェ村まで行かねばならないので、心ならずもミサにご無沙汰が続いた。司祭さんが彼を呼び出した。「もうちとミサに出んとなあ」。夏の暑い日だった。聖具室に陽が差していた。アントナンは胴衣を脱いで日よ

9）〈La Sainte Trinité d'Aven〉Op. cit. pp. 98–9.
10）〈Antonin du Marqué Blanc〉Op. cit. pp. 161–2.

けをし、司祭さんに「あなた様もマントを脱いで日よけしなされ」と言った。司祭さんは感心し「おまえはわたしより聖人じゃ。もうミサに来んでもよろしい」と告げたそうな。

この二篇の口碑の抄訳（以下、本論で例示する口碑はいずれも拙・抄訳である）を手掛かりにヴァレーの世界を描くことから始めよう。

ヴァレーの人々の生活空間はここで見るとおり基本的に山である。それはもう少し具体的には〈牧草地〉であり、その他の口碑から見てもこれに加えるのにせいぜい、〈山小屋〉〈山道〉〈山村〉などにかぎられる。これが彼らの基本的な生活圏である。この圏内に生息・棲息するのは〈牧童〉〈牛〉〈羊〉である。そしてこの生活圏の秩序を司るのが〈カトリック教会〉と〈司祭〉である。カトリックの教義や神学上の神は彼らには無縁である。口碑に直接語られることがほとんどないことでよく分かる。登場するのはチャペルや十字架のようなモノだったり、あるいはミサへの参列という具体的な行為である。ここには、宮廷、王女、王子、騎士あるいは都市、旅人、芸人、職人、商人などヨーロッパ民話におなじみの場所や人が全く登場しない。この面では、ヴァレーの世界は示差的記号が少なく、おおらかに、単純に分節されている（一方、山の生活や牧畜に関する用語は、平野の民話に比べてはるかに細かく分節化されているのは言うまでもない）。私たちは、この二篇の口碑からだけでも、純朴で篤実な、しかし平板な〈信仰〉世界をすぐに読み取ることができる。ここにある〈教会〉〈ミサ〉〈マリア様〉〈誠実〉などのキーワードに加え、他の口碑から抽出される〈祈り〉〈チャペル〉〈十字架〉（ヴァレー地方では屋根付きの木製十字架が道端の至る所で見られる）などが、この宇宙を内的に結び付ける具体的な媒体の全てであることがまず分かるだろう。

そこで、このようにして構成される構造体をとりあえず〈内〉あるいは、枠世界とでも呼ぶことにしよう。それは一見、安定し静態を示し停滞的である。これが、私たちの分析の対象の基本構造となる。

それでは次のような、口碑はこの〈内〉にどのように関係づけられるか。

罰せられた村、ラリシエール[11)]

ある日、ラリシエール村の男がよその村に用事があっての帰り、たいそう重そうな荷物を持って苦しそうに山道を行く女に追い付いた。女の荷物はゆりかごだった。しかしそれは空だった。手助けを申し出ると、女は断った。一緒に歩き始めると、女は「ラリシエールの村人は驕っている。子供が家事を手伝わぬ。罪が充満している。村は消滅するだろう。ただお前は親切な男なのでお前の一家だけは救ってやる」そういうと姿を消した。その夜、村は山崩れに襲われ全滅した。男の家だけ助かったという。女は死神だったにちがいない。

テネーヴェの牧草地の消滅[12)]

今のテネーヴェ氷河はかつてはこの辺り一番の豊かな緑野だった。ほっておいても牛からはチーズやバターがしこたま採れた。それで、牧童たちは段々いい気になって教会にも行かず酒を飲むようになり、ほとんど働かなくなった。近くにいた一人の貧しい羊飼いが注意をしたが追い払われた。その夜、彼に光輝く人影があらわれ、静かにここを立ち去れと命じた。ひたすら野を越え山を越え逃げた。もういいだろうと振り返ると、さっきまであった青いテネーヴェ牧草地は消え、ただ、月光に青白く光る氷河が横たわっていた。

ここに引いた二篇の口碑は、ヴァレー人にとっては、安定構造と対称的な“不条理”として認識される世界を描く。〈山崩れ〉と〈氷河〉は共に、彼らの生命と生活を規定する安定的牧草地に対峙しているからである。この世界を〈内〉に対しての〈外〉と規定してみたい。

しかし、ここで注意を払わなければならないのは、これらがアプリオリにいわば実体的に存在する〈外〉ではないと言うことである。〈外〉とは〈内〉から排除された部分であり、もとはまごうことなき内部だったことをこれらの口碑は語っている。したがって、そこは岩崩れの「瓦礫の不毛の地」「氷河」と呼ばれることによってはじめて〈外〉となるのである。その逆ではないのだ。そして、〈外〉を“創出する”この行為は、ヴァレー人の安定的〈内〉を保持するために不可欠なものなのである。

11) 〈La Lichière, village puni〉 Op. cit. p. 170.
12) 〈La disparition de l'alpage de Tènèvé〉 Op. cit. pp. 218–221.

私たちは、『滅びゆく口碑』からいくつかの〈山崩れ〉や〈氷河〉や〈(町や村の)滅亡・消失〉の噺を知る。たとえば、ミサに行かずに洗濯していた主婦がいたため、その村が土砂崩れで壊滅した噺(「埋没した旧エイエル村」[13])などである。これらはいずれも、上に述べたように、枠世界から示差的かつ意味的に析出される〈外〉を寓意すると解釈される。

このような解釈の延長線上に、〈ペスト〉にまつわる口碑も位置付けることができるだろう。ペストはいわば〈外〉から侵入する病として描かれているように見えるが、実際はヴァレーの人々はこれを、外なる病気として恐れたのではなく病の寓意的"意味"を恐れたことがいくつもの口碑からよく分かる。たとえば、奢侈に明け暮れる村がペストに襲われ赤子一人残して全滅する噺(「ペスト」[14])は、まさに内にこそ崩壊の因子があることの指摘なのであって、すなわち枠世界内の異端排斥の物語と読み替えられるべきなのである。この点で、さきのテネーヴェ氷河の噺と同じメッセージを運んでいるのである。また交易に繁栄したローヌ河畔の町がある日、濁流に呑まれ消えてしまう噺(「グリュエの町」[15])に見られるように、一般に〈町の滅亡〉もその自然的原因がなんであれ、本質は内因によるのだ。グリュエの町がローヌ河の氾濫で忽然と消失したのは決して自然災害でなく、牧畜共同体と相入れない商業という"悪徳"に驕る町を〈内〉から排斥する物語なのだ。

私たちは、人間の〈死〉あるいは〈死者〉の噺も同じ意味を付与されているのではないかと考える。死の噺は『滅びゆく口碑』で大きな比重をもって語られている(142話中20話)が、死こそ〈外〉の世界のもっとも重大なシンボルであるからだろう。

不注意から牛が事故死したことを雇い主に隠した牧童が牛の祟りにあって死んでしまう噺(「ソルニヨ草地の牧童二人」[16])、無神論者が死に、その葬儀の最

13) 〈Le vieux Ayer englouti〉 Op. cit. pp. 254–6.
14) 〈La peste〉 Op. cit. p. 72.
15) 〈La ville de Gruë〉 Op. cit. pp. 60–64.
16) 〈Les deux bergers de Sorniot〉 Op. cit. pp. 53–4.

中に悪魔が遺体をさらって行く噺（「ミサに一度も行かなかったユーゼーニュ村の男」[17]）、踊り好きな三人の村娘が原因不明で死んでしまう噺（「サン＝リュック村の三人娘」[18]）など、いずれも“生”の秩序の側から押し出される死を扱っている。ここでの〈死〉を因果応報のバチアタリの物語のレベルで読んですます通俗的解釈を私たちはとらない。その根底に、死を生命の異端者として排斥する構造が横たわっているからである。なぜなら、ここでも生命とはたんに肉体のそれでなく、〈内〉に規定される意味としての生命だからである。上の三篇の噺から言えば、ここで示差的に排除されたのは不誠実な生命、神無き生命、享楽的生命であって、生命一般ではないのである。このような排除によって、私たちの目の前に示差的にヴァレーの人々の“命”が浮かび上がってくるのである。

そこで、このような生命にあらざる生命、すなわち有徴の生命に至る契機にどのようなものがあるかを口碑の中から拾い出してみる。まず、さきほどの〈不誠実〉〈享楽（とくにダンス）〉〈不信仰〉のほかに〈怠惰〉〈盗み〉〈利己主義〉〈悪戯〉などが発見できる。おおよそカトリックの教義の中の禁止事項と考えてよい。村の教会で、ミサの度に繰り返し説教され、年長者が事あるごとに真面目な顔で語り、それがいく百年もに亙って人々の心と身体に染み付いていった道徳律。しかしこの道徳律からヴァレーは出来たと、単純には言えない。むしろ、ヴァレーの心性がそれを必要し、共に育み、それが再び彼らの心性に影響を与えていったとかんがえたい。

これらの契機のいずれかによって触発された不幸（その大方は死に結びつく）が語られる口碑は全体で49篇もある。しかし、さらに興味深いのは、それほど数は多くないが、〈都会〉〈美女〉〈金銭・商業〉などを契機として、生命が〈外〉へ放出される物語が見られることである（それぞれ4篇ずつ計12篇）。その一例をあげよう。

17）〈Celui d'Euseigne qui n'allait jamais à la messe〉 Op. cit. p. 162.
18）〈Les trois jeunes filles de Saint-Luc〉 Op. cit. pp. 252–3.

二人のパリ娘[19)]

アニヴィエールの谷を、ある牧童が通っていると遠くの氷河から二人の大そう美しい娘がやって来た。こんな所でなにをしていなさる、といぶかって訊くと、娘は「向こうの氷河で百年間、罰のためさまよっていました。これからまた別の氷河に百年の罰を受けに行きます。」と答えた。罰を受けるにはそれなりの悪業をされたのであろうと言うと「いいえ、あたしたちはただ快適な生活をしただけなのです」と答えた。それで住まいは何処だったのだと問うと「パリでした」と答えたという。

アルバ村に伝承されているこの口碑は極めてヴァレーの枠世界をよく描き出している。彼女たちが快適な生活をしたパリ娘だったという理由だけで煉獄（の民間的なイメージ解釈）で苦しむ。パリは都市文明の持つ様々な属性の象徴としてここに上げられと見るべきだから、これを一般化して言えば、都会＝悪徳・堕落というヴァレーの共同体をおびやかす可能性のある忌まわしいシンボル一切の排斥なのである（ここで、ヴァレー州に強い関心を示したジャン＝ジャック・ルソーの〈反・都市文明〉を想起するのは過剰解釈だろうか。本論の目的からはずれるからここでは触れないが、私たちはこのようなコンテクストでのスイス人ルソーの心性を見ることに興味がある）。これらいずれの口碑もヴァレーの共同体構造に備わっている、内から発生する異物排除の“免疫”センサーの働きを示している。そこから、ヴァレーの心性がたえず、積極的に〈内〉を定義し、その定義を能動的に活性化していく姿がうかがえる。

このように、ヴァレーの〈内〉と〈外〉は決して二項対立的な二つの世界を表すものではない。山道、牧草地、山小屋、山村、牧畜などのヴァレーの人々の基本構造がカトリック教会、チャペル、ミサ、十字架、質朴、信心などのシンボルによって“健康に”維持されるためにこそ、山崩れ、氷河、ペストそして死という忌まわしい異物が示差的に析出されるのだから。このように、〈外〉は、むしろ〈内〉の本質的属性だと言い換えることも可能だという意味で、ヴァレーの心性の重要な内面であるのだ。

19)〈Deux Parisiennes en peine〉Op. cit. p. 129.

Ⅳ

私たちは〈内〉と〈外〉という括りかたでヴァレーの世界をイメージしてきた。しかし、感知された異物の排除は、どのような方法でメッセージ化されていると見ればよいのだろう。

そこで、私たちは、口碑の中にしばしば登場する〈悪魔〉(13篇)に着目をしてみた。この悪魔が、ヴァレーの人々の心性にどのような記号として組み込まれているのかを見るためである。悪魔は、一般的に言えば、言うまでもなくキリスト教の未だ及ばない世界の象徴だが、その神学上の概念としての〈悪魔〉が、この口碑に見るヴァレーではさらに〈外〉一般にまで拡大されているのである。

悪魔を異物指摘のためのサインと解釈することによって、私たちはヴァレーが“反世界”へ転落しうる危険な契機とその抑止のメカニズムの姿を思い描くことが出来るのである。三人の若者が山道で三人の絶世の美女に会い、山小屋へ誘うと、ついて来た。梯子段を登るとき、ふと娘の足を見るとカギ爪が生えていた、悪魔だったのだ、という噺(「美人には気を付けよ」[20])など見られるように〈悪魔〉はヴァレー口碑では頻繁に〈美女〉〈都会の紳士〉〈商人〉〈金持ち〉〈バイオリン弾き〉などに姿を変えて登場する。これらはいずれもヴァレーの〈内〉を乱す危険な要因なのである。すなわち、反ヴァレー世界の象徴である“都市文明”のまばゆすぎる不安定な光なのである。これらはたしかに、外の世界からの来訪者という形をとっている。伝承物語では悪魔はトポロジカルに〈外〉から来る、と語るが、実は内部からこそ〈外〉は来るのだ。なぜなら、異物を識別するには内部が自己保全のアイデンティティ=抗体を持つことが前提で、その抗体は、通俗的には外敵に対して一致団結し、警戒を固める共同体防護のためにあると見られる。しかし、実際には内部の崩壊防止こそが、その役目なのである。いちばん恐れるのは、内部がその抗体を持たなくなり、自ら崩れ去ることなのだ。いささか、寓意的に語れば、免疫疾患としてのエイズが

20)〈Méfiez-vous des trop jolies filles〉Op. cit. pp. 88–9.

人々をおそれさす理由がまさにそこにある。

V

このように〈内〉(この枠世界の媒体を語る口碑は15篇ある。口碑の分類についてはいくつかのキーワード・テーマが重複することが多いので以下の篇数の総計は実数を上回る)と、排除されるべき〈美女〉〈商人〉などの異分子(同59篇)とそして〈外〉(同47篇)という関係のネットワークとして捉えられるヴァレーの秩序が、私たちの規定するヴァレーの心性の制度的なものである。しかし、ヴァレーの口碑は、その制度からさらにはみ出る事象についての噺をかなり持っているのである。それは、頻繁に登場する〈マジナイ〉〈悪霊〉〈妖精〉〈亡霊〉〈幽霊〉などの噺である。この要素についての位置付けをしなくてはならない。これらは、明快な心性の制度、すなわち彼らのたてまえを破るあたらしい要素であり、しかも、その重要性はこの種の口碑の多さ(65篇)からも十分推測できる。

大釜[21)]

マンドロンの牧草地(アルパージュ)でのことだ。毎春、山びらきに登っていくと小屋から大釜が消えていた。みんなは「釜泥棒を探し出そう」と相談をした。それで一人が釜にツエルナ(マジナイ)をかけた。そのことをすっかり忘れ、秋が来ると山を降り、翌年の春また小屋へ登って来たら、なんと泥棒がいたのだ。しかしこやつ背中に大釜を背負ってひからびて立っていた。ツエルナを解いてやるのを忘れていたのだ。

ダマジオ[22)]

マユー村の牛小屋で理由もなく牛が乳を出さなくなった。それで古老の所に相談に行くと「そいつはダマジオ(ノロイ)のせいだな、追い払う方法を教えよう。牛の鎖をはずしてそれを真っ赤になるまで焼いて牛の首に巻け」と言う。さっそく実行した。牛は火傷もしなかったし乳もたっぷり出すようになった。その何日後かに、首の周りが火傷で赤くただれたおかしな男が村をフラフラ歩いていたそうな。

21)〈La chaudière de l'alpage〉Op. cit. p. 147.
22)〈Méfaits de damazios〉Op. cit. p. 240.

アルツエノの妖精たち[23]

マーシュ村の畑から作物がひんぴんと盗まれることが続いた。アルツエノの山の妖精たちがロバをつれて降りてきて運び去るらしい。そのことがなかなか判らなかったのは、妖精がロバの蹄鉄を前後逆に付けて、行方をごまかしていたからだ。村人がやっとそこに気が付いて、妖精を徹底的にやっつけた。妖精は怒って山から岩を全部突き落とした。それが今のアルツエノの瓦礫の山だな。

幽霊[24]

ある夜、グリミジュア村の男が家へ帰る途中、闇の中に、肩に大きな石を担いで畑を一周し、隅まで来ると石を下ろし、しくしく泣いて、また石を担いで畑を回っている幽霊を見た。何度も同じ事を繰り返しているようなので、男は思い切って声をかけてやった。すると幽霊はこう語った「実は、私は生前、隣の畑との境界石をずらし自分の畑を広げました。どうか仕切り石を元に戻すよう息子にお伝えください」。翌日そのとうりにしてやると、幽霊は二度と出なくなった。

この四篇の口碑は、ヴァレーの世界が静止的なたてまえをはるかに超えた不安定な部分を内包していることをよく示している。マジナイやノロイが現実に存在し、妖精や幽霊・亡霊が実際に出没し怪異現象が目の前におこるのだから、その共同体は必ずしも価値安定的な制度一色に染め上げられていないことになる。しかも、興味あるのはこれらはたしかに異質性を帯びていながら〈外〉とは異なって、排除の対象になるとは限らないことである。制度の内と外との間を浮遊する記号なのだ。私たちはこの部分を〈周縁〉と名付けることにしたい。言うまでもないが、〈周縁〉は、先の〈外〉と同様、トポロジカルなものではない。また、このような土俗的習俗に関する事例がキリスト教以前の基層であるとかいう指摘は、ここでは意味を持たない。いま、生きられている現実が私たちの興味の対象だからである。では、その周縁にはどのようなものがあり、ヴァレーの心性にどのような役割的な位置付けがなされるのであろうか。口碑に語られるマジナイ、ノロイの類は上の例にもあるように悪くも使われるが、

23) 〈Les fées d'Artseno〉 Op. cit. p. 146.
24) 〈Les trépassés de Toussaint〉 Op. cit. pp. 113–6.

泥棒よけや病気治療など、有用な使われ方も同時にされる。そのもの自体は体制側から見ても外から見ても、危険、かつ有用な存在である。つまり、あやしげな双方性を持つものである。この体制内のアンビヴァレンスは、生命あるものなら抱え込まなくてはならない内的（肉体的、内面的）な不安定さと似かよっている。

この両義性は、妖精の存在にとくに顕著に見られる。「アルツエノの妖精たち」は害悪を及ぼすが、しかしこの口碑は、妖精を〈悪魔〉と同列に決して扱っていないことに注意すべきだ。というのは、ここでの妖精の悪業は命にかかわらない程度であり、むしろ、妖精との共存を理解できなかったマーシュ村の人間に対する戒めとして岩が転落して来たのである。他の多くの口碑でも、妖精はむしろ愛すべき悪戯者で、善人には人助けもすることもあるし（「グランガルドの妖精」[25]）、山の男と結婚もする（「妖精と結婚した男」[26]）。しかし、必ずどこかで人間が約束を守れず破綻するようになっている。妖精はつねにあやういところで人間と共生している。

この〈周縁〉は、ヴァレーの共同体が内的な毒をたえず排除しながら静止的な〈内〉として堅固になろうとする動きを、たくみにズラすことで抑制しているとかんがえられる。人々の精神を開放したり、逆に緊張を与えたりする、共同体にとっての活性要素だと思われる。マジナイや妖精は、まさにその不合理性ゆえに、存在意義があるのである。というのはつねに内的合理をめざす共同体の論理は、実は生命体としての共同体を硬化させ、はては殺してしまうことを、逆説的だが共同体は知っているからである。だからこそ、ヴァレーの人々はこの〈周縁〉を“現実”ととり、そのあやうい作用によって、はじめて共同体を活性化しているのである。

この口碑集に、ヴァレーの人々によって一種の悪霊と信じられていた〈シュヌグーダ〉の噺が七篇ある。これは下ヴァレーに遍在するきわめて独特な口碑である。シュヌグーダは、インフォーマントによってその概念にズレがあるが、

25）〈La fée de la Grand-Garde〉 Op. cit. pp. 48–50.
26）〈Mariage avec une fée〉 Op. cit. pp. 118–9.

一応のところは夜中に突然襲ってくる得体の知れない奇怪な騒音の悪霊である[27]。山の人間が日常的に知っている自然界の音の範囲を超えた相当に特異な現象で、それがなにに由来するのかは不明だが、口碑はこの悪霊を視覚的には描写しない。すべて音のみである。それは、漆黒の闇の中の不可視な異物をいかに共同体が畏怖したかをよく表している。たしかに、シュヌグーダはある時間が経過すればかならず通りすぎてくれる。逆らわないで家の中に閉じ籠もることが対処のルールである。つまり、共同体原理は、それをなにとは説明し得ないが〈音〉(それは同時に、不可視の象徴である)によるサインが発せられたら、ただちに〈知ろうとはしない〉体制に入ることを教えているとかんがえられる。つまり、このシュヌグーダは決して排除もされなければ共存もしない浮遊する恐ろしい内部なのだ。このような内部の不可解な発作をかかえることは、生命体としての共同体に不可避なのだと、人々が考えたにちがいないのである。

また〈幽霊〉にも、これと類似した寓意が込められていると考えられる。幽霊は苦業しながらさまよう救われない魂だから、要するに煉獄の民間解釈なの

27) シュヌグーダ la chenegouda は『滅びゆく口碑』では、「ありとあらゆる音が混じり合っている。歌声、叫び声、音楽、騒音」(下ナンダ村)「とくに冬の夜暴れる、悪意のある騒々しい悪霊の集団」(グリミジュア村)「鈴、鎖、鎌、シャベル、大きな叫び声などの混じったもの」(アルバ村)「夜中、豚の集団の叫びのような、およそ考えうる限りの騒音の混じったもの」(レザゼット村)「悪魔、小悪魔の集団」(エレマンス村)「夜の獣の集団の通過」(サンマルタン村、フュイ村)「ありとあらゆる動物の鳴き声」(パンセク村)などの説明がなされている。この共同幻聴は下ヴァレー独特のものらしく、私たちが調べた限りでは、上ヴァレーには存在しないようである。Cf ; Josef Guntern : *Volkserzählungen aus dem Oberwallis*. 1987. ドイツ語圏スイスでは、「シュトレゲレ」die Sträggelä とか「幽鬼の軍勢」das Wilde Heer とよばれる現象があるが、多分に個別的・実体的でシュヌグーダと同一のものとは考えられない。また、グリムの『伝説集』にもスイス・ルツェルン州の伝承として「テュルスト」der Türst または Dürst、「ポステルリ」das Posterli、「シュトレゲレ」die Sträggele などの現象の報告がある(270番)が、これもクリスマス行事と関係させているので、シュヌグーダと同一の現象とは思えない。一方、他のスイス・ロマンドではやや似た現象がある。たとえばヴォー州の「シェッタ」la chetta である。Cf ; Alfred Cérésole : *Légendes des Alpes vaudoises*, 1885. pp. 179–186. なお言うまでもないが、シュヌグーダはいわゆる〈シャリヴァリ〉や〈ポルターアーベント〉などの婚姻風習とは全く別の自然現象である。また〈ポルターガイスト〉のような家屋内の現象でもない。

だが、それはキリスト教の教義的解釈でもいわば不安定な浮遊部分である。パスカルがいみじくも指摘したように、煉獄の苦しさの本質は審判の «incertitude»[28] にある。それは「不確かな」「あいまいな」「あやふやな」「不安定な」「漠とした」救いにたいする先の見えぬ底なしの恐怖である。しかし、それは、必ずしも決定的な絶望ではない。至福と絶望の間の浮遊期間である。そのため、たいてい、幽霊の苦業には、気の遠くなるような長い年月と稀にしか訪れない幸運を要求されるとしても、必ず、目標点があるように、口碑では語られている。これは絶望と希望との間を揺れ動く人々の現実生活の投影ともいえる。サヴィエーズ村の伝承噺の「空からの声」[29] では、「烏が胡桃の実をくわえ、岩山の頂に落とし、そこから芽が出て、成長し、その木から聖杯が作られ、その杯がサヴィエーズ村の子供の初めてのミサに使われる時」さ迷える魂は救われるという。人がその確率の低さに絶望するか、それとも無限の時間の中での待機はむしろ好機だと思えるかは、じつは、生きているヴァレー人への問いかけでもあるのだ。

〈周縁〉がなぜ不合理のまま放置されていたのか。それは、キリスト教的規範から、また、限られた人間的身丈の範囲からも、どのような手段を駆使してもこぼれ落ちる異空間が残ってしまうのだと言う共同体の積極的な認識が関係しているではないか。この点で〈周縁〉は、まさに共同体の生命に対してたえずゆさぶりをかけ、人々の精神を解きほぐし、異なる視点を提供し、制度の堅牢さへの疑いをちらつかせる、重要な役割を果たしたのだ。

結　語

ヴァレーの人々の心性構造は、口碑のメッセージの分析を通して見た限りでは次のように確認することができるだろう。キリスト教／信心／誠実／勤労／チャペル／ミサ／十字架などが心性の〈内〉と呼ばれるものの象徴として機能し、一方、山崩れ／氷河／ペスト／死／滅亡が〈外〉の象徴として機能してい

28) *Pensées*, Lafuma 版、921 番。
29) 〈La voix céleste〉 Op. cit. pp. 107–110.

る。つぎに、妖精／マジナイ／ノロイ／亡霊／悪霊などが〈周縁〉のシンボルとなる。ヴァレーの共同体の心性構造はこの三要素から成立している。しかしそれらは単純な三項の並列とか三層でない。基底となる〈内〉に対して、その内側で、不信仰／享楽／盗み／都会／美女／金銭／商業などに象徴される異物が発見されると、それに対して悪魔／魔女という表徴による警報が発せられる。異物は場合によっては排除される。その排除される対象が〈外〉であって、これは位置としての外ではなく、常に内側との関係性に規定される外部だと言える。一方、このようにして異分子の排斥により安定をめざす静止的枠を内部から活性化するのが〈周縁〉である。これも内なる周縁である。それはたえず、構造に対して浮遊する危うい存在であるが、このアンビヴァレンスゆえにヴァレー共同体は生の躍動が保持できていたとかんがえられる。

以上がヴァレーの人々の心性の構造である。もとより、それはこのように一面的なものでなく、均質性のなかのゆらぎや、静止への願望とそれらを崩そうとする動きとの葛藤などが多面的・重層的に混在しているだろう。しかし、いずれにしても、このような心性の分析はおそらく多くの伝統社会にもあてはまるのではないかと私たちはかんがえるものである。すくなくとも、ヴァレーの口碑からは、近代の合理主義の氾濫から隔離されていたかつての、かれらの社会が凝固もせず、いかに自然におだやかな生命を維持していたかがよく表れている。そして、そういう世界はもう現代のスイスからは消えてしまった。しかし、それは基底としてのカトリック世界が自己崩壊したのではなく、逆に、“真の”外が流入することにより排除すべき〈外〉がなくなり、〈周縁〉も消えたため、本体自身がすでに示差的自己を維持する必然を失い無規範状態に入り込んだからであろう。この意味で、今日、私たちの“エランヴィタール”というのは一体何に由来しうるのか、という疑問を解きにくくした近代について、稿をあらためてかんがえてみる必要があるだろう。

（筆者は法政大学社会学部教授）